



初霜や森の噴水炎のごとし
落葉踏む心定まる日なりけり
榎植の実髪を豊かに次の世は
てのひらに囲ふ綿虫夫癒えよ
吾が在るを確かむるごと落葉踏む
身の内に遠きもの抱く田鳧かな
柊の花蒼穹は水の器
縄張を保つ千蛸冬ぬくし
花八手貧しき頃のまま咲けり
船乗りのひと日の糧を冬林檎
悔い一つありて眩しき枯野かな

*

伊吹山古事記の頃の雪が降る
わたしが元気なら寒禽も元気
てのひらにいつもゐる母枇杷の花
冬林檎不意にかなしき夜空かな

唐澤南海子
許勢元貞
清水迥径
久保美智子
芳川莞久子
古畑富美江
吉川教子
柴田洋子
中澤良子
一志貴美子
吉池史江

増田義幸
長尾裕美子
依田ひろ
西牧千恵子

深刻にならぬやうにと落葉掃く
かなしきはジャズの音色よ沖縄忌
十二月八日獣無用に争はず
北風好きの風車びんびん男鹿つ晴
あらたまの手毬の如きおばあさま
大櫓木返せば家霊よろこべり
梟と百面相の少年と
秋まつり木賊まみれの婆とゐる
極月や紅絹のはたきを魔除とす
怖さうなバツハ嚏をしてご覧
全天の眼よ冬の満月よ
語り部はうばゆりの実よ開拓記
生牡蠣の殻積み上げる懺悔とも
若水は宝の如し父想う
砂澤のビッキの忌さは春近し

*

玉木愛子
倉科繁登
小池孝雄
山田一政
寺沢はるみ
渥美人和子
寺島芙美子
中岡草人
小宮山秀子
珠風夕波
峯敦子
市川静子
小熊旭
土屋隆
石田九吾

岳の源泉 二月 486

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。同人総会で提案した岳集と同人集への投句につき、六月頃までに決定案をお知らせしたい。同人は同人欄に、岳集は同人を目指す会員に。その場合、同人の投句数および選者が手を加えるかどうかが問題となる。選をしない代りに推薦句以外にも佳句に*印などをつけ、当然順位付けを考慮するなど。よい案があったらお聞かせください。

初霜の森一見——噴水の炎

初霜や森の噴水炎のごとし 唐澤南海子

初霜の日の美しさ。公園の森か。噴水に旭が射す。炎とみた作者の心の張り。このときの生の充実を讃えたい。炎ということで、心中の迷いや悩みを超えようとしたものか。表現は力。炎とみることでおのれを励ます明るい姿勢がいい。

落葉踏む心定まる日なりけり 許勢 元貞

落葉を踏むなげない行為が心の安定をもたらす。気になっていたことや迷いがふっ切れる。予定していたことではない。偶然。落葉を踏む足裏への感触は意外にも心にひびく。ささやかな発見。歩くことには、こんな喜びがある。

榎植の実髪を豊かに次の世は 清水 道徑

花八手貧しき頃のままだけり 中澤 良子

日陰に誰にも注目されないでクリーム色の毬状の花序を持つ。食べるのが精一杯の戦後の日も今も変わらない。ひたすらのまじめさにご苦労さんと礼をいゝたい気持。中七がいい。

船乗りのひと日の糧を冬林檎 一志貴美子

冬林檎一つで一日の航海とは清貧この上ない船乗り。珍しい着眼に感心した。詠み方の常態から遭難とはとれない。

悔い一つありて眩しき枯野かな 吉池 史江

後悔という自分のへこみは凡々たる枯野が輝いてみえる。人は気持のもち方一つ。地味な枯野の力の発見がいい。作者

今月の秀句

てのひらに囲ふ綿虫夫癒えよ 久保美智子

知らないとき気付かないほどのささやかな初冬の小虫、綿虫。病める夫への快癒を願う思いがこんなひそやかな行為となった。綿虫のいのち。いのちあるものよ。一木一草、いのちあればこそいい。元氣なときは気付かないことに、自分が病んだり、家族に病人が出たりした折には、はっとさせられる。病は心を大きくひろげてくれる。見えないものを見せ、忘れていたことを気付かせてくれる。ご快癒を。

つるつる。気にしない。この大げさないい方がユーモア。

吾が在るを確かむること落葉踏む 芳川莞久子

〈落葉踏む心定まる日なりけり 許勢元貞〉の行為をもう一步自覚的に自分を介在させる。落葉を踏むことは、ふだん気付かない見えない自分のかたちを捉える機会ともなる。思索好きな作者。行先が見えない時代の不安はつねに自己を拡散させる。落葉季には落葉から勇気付けられる。

身の内には遠きもの抱く田鳧かな 古畑富美江

初冬の刈田に渡来。三十センチほどのチドリ科の鳥。後頭部に立てた冠羽をたえず動かしながら、小刻みに餌をあさるのも、「遠きもの」を抱えているからと推察。見方が深い。

柊の花蒼穹は水の器 吉川 教子

柊が花を付ける冬。ことしは雨雪が少ない。本来青空は貯水池のように水の器。どうしたのかしらと空を仰いだものか。

縄張を保つ干蛸冬ぬくし 柴田 洋子

岡山の作者、瀬戸内風景か。干蛸の縄張がおもしろい。おかげさまで暖冬、干蛸が次々と仕上がってというものか。

は枯野いっぱい冠着トンネル根つこの村人。崇高の地よ。他に雪嶺集・前山集から推薦候補作を掲げる。

石路咲くや瓦土塙を歯嚙みとも	小林 貴子
湖の真中へ向かふ雪ばんば	窪田 英治
核兵器持たずと決めて大根干す	宮地 良彦
頭の中に虫を飼ひ居る霜夜かな	竹村 逸子
五郎助は首が回りにて金満家	古屋 洸

わたしも元氣、寒禽も元氣

わたしが元氣なら寒禽も元氣 長尾裕美子

そうやそうやと囁きたい。寒中のふくら雀も元氣いっぱい。なによりも私が元氣。話しことばが大いに読み手の共感を呼ぶ。地球の老齡化、わが国も高齡化の中で、元氣な一句を。

てのひらにいつもある母枇杷の花 依田 ひろ

掌から母を思う。母似の手か。母を思えば、幼時からの愛情いっぱいというのであろう。詠い尽された掌がこんなにもいいという思いを育むのは、初冬の枇杷の花を配し品格ある情緒を掌に集中させた一句の構図と句材の素朴さがよかった。母性のなつかしさを詠う句は多いが、その中でも淡白に情感を抑えたのが成功した。岳俳句会賞受賞者の初々しさ。

冬林檎不意にかなしき夜空かな 西牧千恵子

夜空はかなしいものであるが、不意にといい、その衝動的

な情感に冬林檎を配したところに注目。例えば千曲川洪水のため荒廃した北信の林檎園の上に展がる夜空を想像した。

深刻にならぬやうにと落葉掃く 玉木 愛子

落葉掃きは意外に知的。動作が単純であり、深刻になりようがない。ふさいだ気持を適度に転じてくれる明るさも落葉にはある。家の中には深刻な話題が詰まっても、外へ出る。落葉を掃く。落葉効果というものがあろう。

かなしきはジャズの音色よ沖縄忌 倉科 繁登

学生時代の昭和三十年代、私の記憶では戦後の音楽というアメリカ占領軍がもたらしたジャズであった。一九七二年までアメリカ占領下におかれた沖縄こそジャズの島だという

今月の秀句

伊吹山古事記の頃の雪が降る 増田 義幸

倭建命伝説。伊吹山の白い猪（山の神）との闘いに疲弊した建がやがて能褒野で大和を国のまほろばと讃え詠って亡くなる神話は天皇家のルーツを想像させる、よく出来たドラマ。その舞台に伊吹の雪は演出効果絶妙な語り手のごとし。今も昔も伊吹山を神の山と仰ぐ三重の国人。なつかしい佳句をものし、こゝに義幸ありと諸人に印象付ける。長い冬眠から覚めたように、中京の地がみどりなす日への期待が大きい。

「木賊」か。子と別れた老人が子と再会する話。こゝは婆（妻）へのいたわりの作。老境の夫妻のたたずまいがうかがえる。苦労をかける連合への恩返しの一句か。

極月や紅絹のはたきを魔除とす 小宮山 秀子

粹なはたき。はたかれた魔もうつとり。女性の長着の裏地の紅絹。極月・魔除と連なると空気も妖しい。

他に岳集推薦候補作を掲げる。

野水仙抱へまどろむ安房少女 塚原 白里
友は今竹馬に乗り駈け逝けり 若月 行人
冬の犀尿六尺の大噴射 宮崎久仁子
紅天狗茸みたいな女空港に 玉井 利之

うばゆりの実が開拓の語り部とは

語り部はうばゆりの実よ開拓記 市川 静子

今月の秀句

怖さうなバツハ嚏をしてご覧 珠風 夕波

久田恭子二十七歳の才媛、名を改め、これは珠なす富山湾の夕風。バツハはカツラを冠った怖そうな顔。笑ってではなく、嚏をという注文は秀逸。口語調の表現も巧みな現代俳句。

印象が強い。「かなしきは」二云々は心にしみるなつかしさを回想したものか。沖縄を思えば悲喜こもごも。ぐさり正攻法の詠い方に感心した。

十二月八日獣無用に争はず 小池 孝雄

日本の近代、現代とは、なんと人間力が低下した時代であったか。その最たるものが十二月八日の開戦に象徴される第二次世界大戦。猪や熊にも顔向けができない。

北風好きの風車びんびん男鹿つ晴 山田 一政

ひたすら男鹿の地貌詠。北風好きの風車が冬の男鹿の空気をかき廻す大景。明快な構図に上天気のはたはたの地が見えるようだ。もっともはたはたは海荒れの魚か。

あらたまの手毬の如きおばあさま 寺沢はるみ

これはおめでたい。おばあさまおいくつかと訊ねたい。

大櫓木返せば家霊よろこべり 渥美人和子

〈大櫓をかへせば裏は一面火〉（素十）を踏まえ、旧家の「家霊」を出す。よく考えました。これは人和子句の佳句。

梟と百面相の少年と 寺島美美子

動物園の梟とにらめっこの少年。なんとか喜怒哀をと躍起。生憎、梟は目をつむっているものか。ひたむきな作者。

秋まつり木賊まみれの婆とゐる 中岡 草人

草人さん得意の古典もの。秋祭の神楽殿、出し物は謡曲

語り部の比喻ともとれるがこゝは姥百合の実が開拓の艱難辛苦の語り部ととる。十勝開拓地の丈高い姥百合を讃えた作。都人は見向きもしない姥百合への愛情。歳時記も変ってきた。

全天の眼よ冬の満月よ 峯 敦子

あまり見向きもされない冬の満月の澄んで透徹したさまを「全天の眼」とみた。一つの発見があろう。地球のすべてを見透かすような冬の月である。思惟の結晶のようだ。

生牡蠣の殻積み上げる懺悔とも 小熊 旭

いわれるとなんともかなしい光景だ。平然と食べた後のざんげとは虫のいい話。俳句に詠まれなければ気付かない。着眼が鋭い。

若水は宝の如し父想う 土屋 隆

湧き出から汲み上げた元朝の若水。清冽そのもの。それが父のイメージにつながるとはまことに清廉な（けがれのないすつきりした）面影が思われる。この父にしてこの子ありの感がする手堅い作。下五音の素朴さが新年詠にふさわしい。

砂澤のビッキの忌さは春近し 石田 九吾

砂澤ビッキ（一九三一〜八九）は知らない人もいる。北海道生まれの世界的な彫刻家。詩人でもあった。札幌の道立文学館で三月二十二日まで「砂澤ビッキの詩と本棚」展開催中。「さは」は方言か。ビッキの忌になったんで春はもうすぐ。句材がまことに地貌そのもの。表現もまた。

推敲・添削 ⑥ ●●●●●●●● 宮坂 静生

○気になる表現

周知の句材を用いた有名な俳句に気をつける

原句 寒山も拾得も来て落葉焚

寒山拾得は名高い中国唐代の伝説上の詩僧。森鷗外の小説にも詳しい。俳句にもしばしば詠まれる。

例句 寒山は焚き拾得は掃く落葉

芥川龍之介

寒山も拾得も居ぬ落葉かな

相生垣瓜人

寒山と拾得とよる落葉搔き

許六

いずれも知られた句。掲句は許六の句に似ている。作者は知らなかったと思うが、いずれの句も着想が似ている。そこで私は採らない。

「貰う」という表現は安易

原句 山茶花の紅色に霸氣貰ひをり

添削 山茶花の紅色に霸氣ありにけり

○このように推敲し添削する

語順を変える

原句 少しの冬陽も惜しみ羽搏ちぬ丹頂鶴

北見 弟花

「少し」は不要。語順を変えたらどうか。

添削 丹頂鶴^{たんちょう}の羽搏ちぬ冬の陽を惜しみ

発想を変える

原句 息子と共に手羽先肴に冷卸

池田 康樹

「息子と共に」の表現、「冷卸」は違う表現に。

添削 手羽先を肴に吾子と年忘
表現を正確に

原句 街の灯は釣瓶落しか人溢れ

船坂 昌文

灯が釣瓶落しということがわからない。発想を正確に。

添削 街に灯の入りて釣瓶落しかな

原句 泥屋根を覆ふ粉雪縄文園

「園」という言い方は正確か。安っぽい感じがある。

添削 泥屋根を覆ふ粉雪縄文遺跡

中七に「かな」を用いない

原句 納戸にも日さしたるかな冬至の日

山岸 俊一

添削 納戸にも日のさしいたる冬至かな

響きがきたなくならないように

原句 早池峰も雪の衣で輝けり

滝田 程子

濁音「で」は、代えられる時は代える。「も」も注意。

添削 早池峰の雪の衣の輝けり

並列が気になる

原句 亡き父と一番星と冬の空

住 公人

添削 亡き父は一番星や冬の空

五・七・五のリズムを大事にする

原句 紅葉の園白き毛並みの手長猿

佐藤 雅代

添削 紅葉中白き毛並の手長猿

代表的な切字「や」「けり」を一句に用いない

原句 大根や大地を蹴って肥りけり

赤澤 久喜

添削 大根や大地を蹴って肥りおり